

La Informilo de NEC

# センター通信

第273号

2014年7月2日発行

名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro  
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニブル新栄301号  
郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]  
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>



NEC 四十周年記念パーティー 前田可一撮影

## 「センター通信」273号の目次

2014年度 センター委員長として .....	山口真一.....	2
NEC 四十周年記念パーティーの報告 .....	Ikai Yosikazu.....	4
JEIからの祝辞 .....		5
名古屋エスペラントセンター (NEC) 小史 (1) .....	鈴木善彦.....	5
センター関連出版物紹介 .....	伊藤俊彦.....	9
センター関係出版物一覧 .....	鈴木善彦.....	11
La 63a Esperanto-Kongreso de Tokaj .....	西尾晴孝.....	12
12 tagoj en Koreio ... miaj spertoj .....	Sunjo.....	15
読書会 第1回が... .....	伊藤俊彦・山田義 .....	19
出版されました! 『エスペラントは「私の大学」だ』 .....		20
編集委員から—— .....	前田可一 .....	20

## 2014年度 センター委員長として

2014年4月17日 山口眞一

3月16日、名古屋エスペラントセンターの総会において委員会が選出され、その互選により、引き続き私・山口が委員長を担当させていただくことになりました。委員は全部で7名、他の委員のみなさんに支えていただきながら、活動の調整役の任を果たしていきたいと思います。

名古屋エスペラントセンター（以下NEC）は、「名古屋」という地域名を冠しているものの、通常の地方エスペラント会とは異なる性格を有しています。規約の第3条には  
エスペラントの深化発展のために有形無形のサービスを以て貢献することを目的とし、総合的・普遍的エスペラント文化のセンター建設への活動を行う。  
とあります。一般にエスペラント運動といえば、宣伝普及・学習教育・実用などの面が思い浮かぶところですが、NECでは、図書資料の収集保管、図書販売、講演会などをその事業項目にあげています。これが全国でもNECがユニークな存在として認知されているゆえんです。

NECは1974年に発足し、40年間事務所を維持しながら活動を続けてきました。名古屋という都市の中心部に事務所を持つということは、とてもたいへんなことです。実情をいえば、財政は常に火の車です。そんな中でとにもかくにも40年間続けてこられたのは、ひとえに維持員をはじめとする皆様の支援のおかげです。維持費は年額6000円から36000円と、ふつうのエスペラント会よりもかなり高額に設定されています。にもかかわらず、NECの目的を理解して維持費を拠出し続けて下さっている、このことにまず御礼を申し上げます。

しかしながら、NECの活動実態は決して満足のいくものとはいえません。せっかくの事務所を構えていながら、利用者数・利用回数とも十分とはいえません。この点での改善をはかるため、Konversacia Rondo という定例会を新規に立上げました。気軽に寄っていただきたい、と願っています。

NECは前述の通り、通常の地方会ではありませんが、それでも当地（東海地方）のエスペラント運動の主要な担い手である事実にかわりはありません。エスペラント界内部での交流や連携、および対社会的な情報発信という点で、NECは重要な役割をになっています。従来のような機関誌発行およびウェブサイト運営は基本線ながら、加えてメーリングリストやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のような方法も、試行錯誤しながら活用を図る必要があります。SNSのユーザーは年々増え続け、全世界的なネットワークを作るものですから、私たちのエスペラント運動でも活用次第によっては大きな可能性を秘めているといえます。情報発信および世界的な連携強化のため、NECのFaceBookページを立上げました。可能な方はアクセスやシェアによってご支援くださるよう、お願い申し上げます。

## 名古屋エスペラントセンター規約（抜粋）

(目的) 「センター」は、エスペラント運動の進展を願って、エスペラントの深化発展のために有形 無形のサービスを以て貢献することを目的とし、総合的・普遍のエスペラント文化のセンター建設への活動を行う。

(事業) 上記の目的を達成するために、以下の事業を行なう。

◎エスペラント文献・資料及び関係文献・資料の収集、調査、保管、貸出等の事業（図書館的機能）。

◎エスペラント図書販売及びその関連事業。

◎センター機関誌の発行。

◎合宿、講演、交流会等エスペラント文化向上のために必要と思われる事業。

(維持費) 「センター」の維持員は、維持費拠出高によって、A、B、C、Dに分け、維持費は次のとおりとする。

維持員A：毎月500円を維持費として拠出する者

維持員B：毎月1000円を維持費として拠出する者

維持員C：毎月2000円を維持費として拠出する者

維持員D：毎月3000円を維持費として拠出する者

維持員は、維持費6ヵ月の滞納で、その資格を失う。

30 (発効) 本規約は、成立の日（1974年3月10日）より発効する。

(以上)



NEC 四十周年記念パーティー。記念講演は「名古屋エスペラントセンター小史」や「センター関連出版物紹介」があった。内容は記事をお読みください。

## FESTENO POR LA 40-JARA JUBILEO DE NEC (16 marto 2014)

### NEC 四十周年記念パーティーの報告

Ikai Yosikazu

Same kiel en siatempa Buronjo-sur-Maró de 1905, ankaŭ en la Nagoja Esperanto-Centro en la 16a de marto ĉi-jare ne bruis pafilegoj ĉirkaŭ la modesta domo, sed ja knaletis festenaj pafiletoj ĉirkaŭ la modesta tablo de "Festeno por la 40-jara Jubileo de NEC".

En la festeno altabliĝis 17 personoj bunte verdaj. Eble triono el ili spiris la antaŭ-40-jaran aeron de NEC, multe pli sufokan ol la nuna. Eble alia triono en 1974 estis ankoraŭ ĵusbakitaj kaj flavbeke verdaj, aŭ eĉ tute ne verdaj. Eble du-tri eĉ ankoraŭ ne estis venintaj en la mondon.

La programeroj estis tri. Unue Historio de NEC fare de s-ro Yoŝihiko Suzuki. Certe la plej kompetenta kronikanto de NEC, li skizis ĝian historion, citante el fidindaj fontoj, ek de la pra-NEC, nome Ĉambro de Esperanto (1973), tra zigzaga irado, ĝis fine la 2014-a NEC de pli vasta luĉambro. Li ankaŭ citis ĉefajn eventajn entreprenojn, kaj parolis ankaŭ pri sinsekvaj ĉefaj redaktantoj de la organo "Informilo de NEC", citante ilian komentojn siatempajn: Ties redaktado teknike evoluis de mimeografo, al mekanika tajpado, kaj poste komputilaj tekstprilaborado kaj kompostado kaj fine interreta kunredaktado.

Post Suzuki raportis s-ro Toŝihiko Ito pri Eldonaĵoj de NEC. Inter ĉirkaŭ 20 eldonaĵoj la plej gravaj eldonaĵoj estas, unue, reprodukto de tuta kolekto de kultura gazeto "Tempo" (1934-40), due kelkaj pecoj el "Plena Verkaro de L.L.Zamenhof" (redaktita de Kanzi Itô), kaj kompreneble, la grandioza "Zamenhofa Ekzemplaro" (redaktita de Rihej Nomura). Tiujn entreprenojn animis s-ro Yoŝikatsu Nagase, kiu dume fojfoje interkomentis. Certe la postaj generacioj memoros tiun ĉi kiel la faktan fondinton de NEC, ĉar en ĝi enkorpiĝis lia idearo. Laste s-ro Tadaŝi Jamada prezentis projekciatore diversajn komunajn fotojn, ĉefe el karmemoraj tempoj. Al la fotoj tute mankis nomoj de individuoj, kaj estis la spektantoj mem, kiuj devis konkurence komentarii kiu estas kiu, kaj tio donis bonan okazon de mensa ekzerciĝo kontraŭ demenco. Kaj kion mi mem faris? Mi nur kalkulis la kolektitajn kotizojn, kaj krome akordionis.

en marto, 2014

Al Nagoja Esperanto-Centro,

Nome de Japana Esperanto-Instituto, mi gratulas vin pro Festeno por la 40-jara Jubileo de Nagoja Esperanto-Centro.

En 1974 Nagoja Esperanto-Centro fondiĝis kaj dum la longa tempo ĝis nun, ĝi daŭrigis havi propran ĉambron kaj diversajn gravajn aktivadojn por Esperanto, inkluzive de eldonado tie. Tio estis tre granda kontribuo al Esperanto-movado en Nagojo kaj ĉirkaŭaj lokoj. Multe da laboro kaj klopodo de multaj esperantistoj devis necesi por la daŭrigo de la Centro. Tre alte mi estimas la agadon.

Denunan pluan disvolvado kaj prosperon de Nagoja Esperanto-Centro mi esperas.

SUZUKI Keiiĉiro,

Prezidanto de Japana Esperanto-Instituto.

## 名古屋エスペラントセンター (NEC) 小史 (1)

鈴木善彦

### はじめに

今年 (2014年) 4月4日にセンターの会員でもあり、長くセンター委員を務めていただいた伊藤 (旧姓小野) 真理子さん【写真は夫妻】が62年の生涯を閉じられました。

真理子さんは南山大学のエスペラント研究会に所属、1974年大学を卒業後は名古屋学院大学附属図書館で司書として勤めておられました。40歳代後半にALS (筋萎縮性側索硬化症) を発症、その後療養生活を送っておられました。

センターが発足したのは1974年ですが、真理子さんは1975年から司書としての知識を活かして、「資料・蔵書」の担当委員となりました。その後1979年にセンターの活動で知り合った伊藤浩治さんと結婚、出産・育児のため多忙になった1983年まで10年近くにわたり「蔵書」担当として活躍されました。在任中は資料の整理、購入図書・雑誌の選定、図書カードの作成等、bibliotekoの充実のために尽力され、現在のセンターの蔵書の礎を築かれました。真理子さんの後は専門的知識のある委員がいないため、「蔵書」担当は毎年のように担当者が交代するなど、系統だった作業ができずに、今日に至って

るのが実状です。

真理子さんが元気だったら子育てが終わったあとには再度、センターの委員として活躍してくれただろうと思ったこともたびたびあり、とても残念です。

今年はセンター発足40周年になります。比較的若い世代のエスペランティストがセンターを立ち上げ、今までに多くの方がセンターに関わってきました。歴代の委員経験者で亡くなったのは真理子さんが初めてですが、委員の高齢化とともに、センターが歴史を重ねてきた証といえるかもしれません。

3月16日にセンターにおいて、「NEC40周年記念パーティー」があり、そこで、『NEC小史』のタイトルでセンター事務所の変遷やセンターの会員状況、センター規約で定める図書販売、機関誌、図書館機能、合宿・講演・交流事業、また出版会のあゆみなどセンター関連の動きについて簡単に報告しました。その内容に加筆修正の上、センター発足当時の仲間であった真理子さんの在りし日を偲びつつ、センター通信で紹介したいと思います。



## 部屋の移り変わり

### エスペラントの部屋

名古屋エスペラントセンターの前身である「エスペラントの部屋」が発足したのは1973年4月である。大森静、高木美智子、竹崎睦子、永瀬義勝、影山実、林和治の6名を中心に、名古屋市東区東門前町2-30（住居表示変更で東桜二丁目13-23となる）の東新ビル2階（206号）に4畳半ほどの広さの部屋を借り、エスペラント活動の拠点としたものである。部屋代は、1万円であった。

狭い部屋であったが、早稲田裕さんが取り扱っていたエスペラント書籍（65万円ほど）を預かり販売活動を行うなど、自由に、時間の制限なく集まることのできる部屋を確保したことで、新しいエスペラント活動への期待と希望で満ち溢れていた。

賛同者が増えるとともに、部屋の狭さが気になってきたため、同年の10月には、同階の筋向いの部屋（214号室、約8畳）への移転が決定された。部屋代は15,000円となった。（引越し月日は不明）

### 名古屋エスペラントセンター①

名古屋エスペラントセンター（以後NEC又はセンターと記す）は1974年3月10日に熱田青年の家での第1回総会で、新たに「規約」が承認され発足した。「エスペラントの部屋」から「エスペラントセンター」になったのである。この時の部屋は引き続き、東新ビル214号室である。

維持員数は37名、委員長は影山実であり、維持員以外に維持費を拠出しない協力者として多くの学生が参加していた。

当時、センターは月・水曜日に学習会を開催し、また日曜日には当番を置いて、週3回定期的に開館していた。

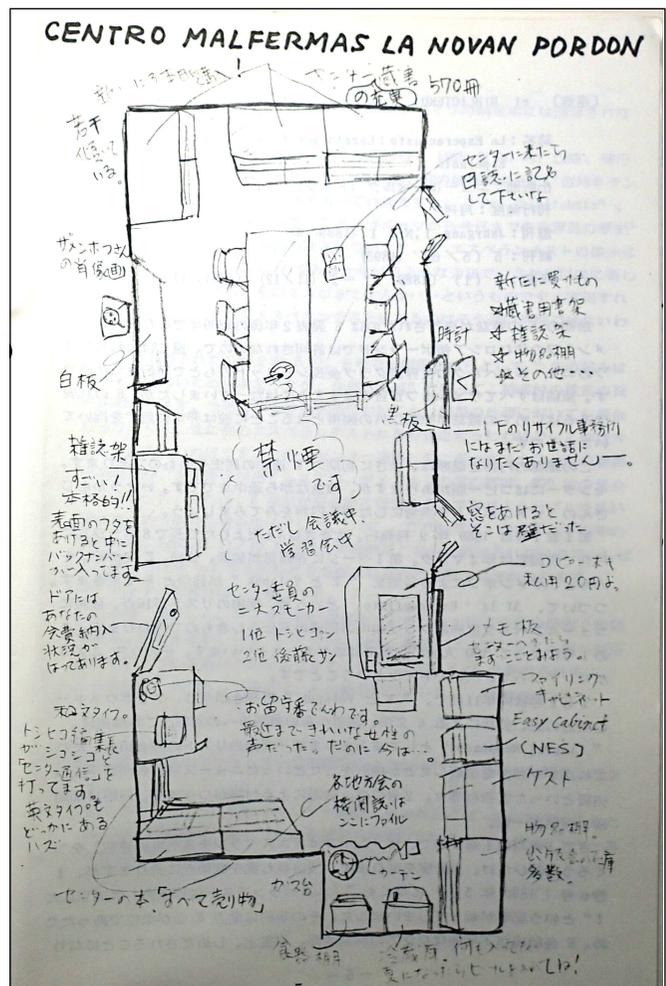
人が集まるにつれ、電話の必要性が高まり、基金を募り（目標8万5千円）、1975年の夏に設置された。電話は葵町への引越し時に廃止するまで、センターの活動に使用された。ちなみに当時の電話番号は931-2355で、「くさい兄さん午後いるよ!」と覚えたものだった。

## 名古屋エスペラントセンター②

1983年、センターの蔵書や販売図書の増加に伴い、8畳ほどの部屋では手狭になってきたこともあり、より広い部屋に移ることを決めた。新しい部屋は204号室（12畳：20㎡）で同じ階の廊下を隔てた部屋である。214号室に移ってから10年目のことである。1980年に「名古屋エスペラントセンター出版会」を設立し、『tempo』を復刻するなど、1980年代前半はセンターの活動が最も充実していた頃である。

移転日は1983年2月6日（日）で家賃は2万5千円から3万円となった。家賃が上がったこともあり、新たに鍵の貸出（1万円）を始めた。

イラストは当時蔵書担当であった伊藤真理子さんがセンター通信用に描いた新しい事務所の平面図である。部屋の様子がわかりやすく描かれており、好評であった。移転に伴い、新たに書棚を3本、雑誌架を1本購入した。当時の蔵書数は570冊であった。



### 名古屋エスペラントセンター③

204号室での活動は20年ほど続き、現在の葵町の新事務所に移転したのは2004年7月である。この移転は東新ビルの建て替えに伴いやむなく移転したものだが、それ以前にも雨漏りがするなど東新ビルの老朽化を懸念して移転等の動きは何度かあった。

1986年には鉄筋コンクリート作りのロータリーマンション（会員の所有物件）への移転の賛否が問われたり、1990年には「新事務所基金」を立ち上げ、2,000万円を目標とした出資金の募集を行ったが、数百万円集まったものの目標には大きく届かず、2000年に解散するなどの動きがあった。（解散に伴い、大部分の出資金は返還されたが、62万円ほどはセンターに寄付された。）

2004年2月に東新ビルの大家（東海興産）からビル売却による立ち退きの正式要請があり、移転の可否について2004年3月のセンター総会で話し合われた。センターを解散したらなどの意見もあったが移転を機により意義のあるセンター活動を行うべきとの意見が多数を占め、移転先については委員会に一任され、現在の事務所に決まったものである。

新事務所は東区葵1丁目26-10 ユニブル新栄301号で、床面積は14.3坪、それまでの約2倍の広さになった。移転後の7月11日に新事務所で臨時総会が開催され、規約等の変更が行われた。家賃はそれまでの38,000円（電気代込みで約4万円）から49,000円（電気代込みで約55,000円）となった。

家賃の大幅な増加や日常的な活動が行われていないことなどから毎月3,000円ほどかかる電話は廃止することになった。

新事務所に移転し、今年で10年になる。移転時に話し合われた「意義のある活動」が十分に行われているとは言い難いが、事務所がより広く、より使いやすいものとなっていることは事実であり、今後とも、事務所にあった活動が行われるよう努力していきたい。



鈴木善彦さんの講演

## センター関連出版物紹介

伊藤俊彦

イタリア滞在中のこの2月に鈴木善彦氏からメールが届いた。来たる3月16日にNEC40周年記念パーティを開催する、については、センターが刊行した出版物の紹介をしてほしいとの趣旨であった。私などでお役に立つのならと早速引き受けた。そうした次第で、今回こうして報告をさせていただいているのだが、最初に断っておきたいのは、私はNECの出版活動のごく一部にしか関わっていないということである。永瀬義勝、森田明両氏を始め、私よりも出版活動に深く関わった人にこそ語ってもらいたいと思う。それと、私は1年半にわたりイタリアに滞在し、帰国してからまだ半月ほどしか経っていないので、いろいろとんちんかんなところもあると思うが、ご容赦願いたい。

個々の出版物については、不十分なものであるが、センターのホームページに「名古屋エスペラントセンターの出版物紹介」と題して、それぞれの出版物の内容を簡単に紹介した記事があるので、ごらんいただきたい。ここでは、そのうちの2、3の出版物に絞って簡単な報告をさせていただく。

私にとって一番思い出深いのは『tempo復刻版』の刊行（1982）である。生意気の内容見本まで作った上で、関西エスペラント大会に合わせて刊行し、大きく新聞報道もされて話題を呼んだ。定価9,800円と、当時としても極めて高価な本であったが、大会やfriska lernejoなどで参加者に売りつけた。今にしては申しわけないことであった。

一木誠也、野島安太郎氏ら編集者を始めとして、当事者はすでにほとんど亡くなられた。初代編集長の服部亨氏の話は不明であるが、1911年生まれであるから、死去された可能性が高い。tempoと関わりの深いランティに終生関心を抱き続けた坪田幸紀氏も



すでに亡く、まことに往事茫々の感が深い。

昨年刊行された『日本エスペラント運動人名事典』を繙くと、ざっと見ただけでも、tempoについて20回ほど言及がある。執筆者として、金松賢諒、甘蔗要、宍戸圭一、柴山全慶、島田虔次、露木清彦、鳥居篤治郎、中瀬古六郎、中原脩司、中村陽宇、西川豊蔵、松葉菊延など、当時の、あるいはその後の著名なエスペランティストの名前があがっていて、それだけでも当時のtempoがいかに充実した情報を発信していたかが伺える。

近年、安倍の靖国神社参拝、従軍慰安婦問題、ヘイトスピーチなど、いかにも偏狭なナショナリズム、歴史修正主義の風潮が目につく。tempoが刊行された1930年代も、マルクス主義、自由主義が弾圧され、やがて大政翼賛会の結成に至るファシズムの時代であり、tempoは、そうした風潮を批判し続けたのであった。従って、tempoは、たんに70年前の歴史の資料にとどまるものではなく、先輩エスペランティストたちが同時代の状況と対峙し続けた貴重な記録なのであって、だから今こそきわめてアクチュアルなものとして読まれるべきなのである。

次に、野村理兵衛『Zamenhofa Ekzemplaro』（1989）に関しては、出版会最大の刊行物であり、まさに本書を刊行することこそを第一の目的として出版会は設立されたのであったが、あいにく私はほとんど関わっていない。始めのうち原稿のチェック（用例と出典との照合）にほんの少し関わったが、とてもその任ではないことを直ちに悟り、遠ざかった。本書の編集は森田明さんがすべて独力で行われた。従って、本書は野村氏の人生をかけた労作であることはもとよりながら、森田さんの10年になんとなす作業の成果なのである。1987年に先行限定版を刊行し、1989年に第一版を刊行した。

本書の刊行により、野村氏は1990年に第28回小坂賞、及び第1回OSIEK賞に輝き、センターからOSIEK賞の伝達と受賞祝賀会のため、野村氏が住まわれる富山県城端町（当時。2004年合併により南砺市）まで赴いたこともあった。その野村さんもすでにない。その他、私はそばで見ていただけであったが、本書の組版も苦労の連続であった。そうした点も含め、出版に至る顛末を書き残しておいてもらいたいと思う。

あと、こちらはセンターではなくJEIの出版活動であるが、1984年5、6月と立て続けにJEIから井上靖作、宮本正男訳の『楼蘭』エスペラント訳と、阪直『エスペラント初級・中級の作文』の2冊が刊行された。この時期、永瀬義勝氏がJEIの出版部長を務めていたため、私はそれらの校正を手伝ったが、それにしても忙しかった。それらを含め、この時期、短期間のあいだに集中的に出版事業を行うことができたのは、やはりみな若くてエネルギーがあったからであろう。老境に足を踏み入れようとしている今、往事を顧みて、まことに隔世の感が深い。

最後に、繰り返しになるが、水野義明、梅田善美、野島安太郎、いとうかんじ、野

村理兵衛など、センターの出版物の著訳者の何人かが鬼籍に入られた。生涯にわたりエスペラントに関わり続けた方々であり、そのご努力に改めて敬意を表するとともに、ご冥福を祈りたい。

## センター関係出版物一覧

(センター★及びセンター関係者による名古屋地方☆での出版物一覧)

☆ 「Por pli da kantado」 (第63回日本エスペラント大会瀬戸の記念出版)	1976年
☆ 「Vulpoj de Ĉironnup」 高橋宏幸作、丹羽正久訳	1979年
★ 「エスペラント語の位置測定」 クロード・ピロン著、水野義明訳	1981年
★ 「ドイツ人ジャーナリストは語る」 (GERMANA ĴURNALISTO KOMENTAS) シュテファン・マウル著、泉幸男・梅田善美、山川修一訳。 カセットテープは別売り	1981年
★ 「tempo」 復刻版	1982年
★ 「La Sagaoj kaj Zamenhof」 Baldur Ragnarsson 講演集カセットテープ付き	1982年
☆ 「La Granda Kantado」 歌集、テープ付き オルキードイ編	1986年
★ 「顔のない仲間たち」 いとうかんじ著	1986年
★ 「Unuaj Libroj por esperantistoj」 ザメンホフ全集第1巻増補改訂版	1987年
★ 「de josuo al jeremia」 ludovikito ザメンホフ全集	1987年
★ 「de jeĥezkel al malaĥi」 ludovikito ザメンホフ全集	1987年
★ 「Nomura: ZAMENHOFA EKZEMPLARO」 野村理兵衛著；先行限定版	1987年
★ 「Aŭstralio」 Spomenka Ŝtimec 著、テープ付き	1988年
★ 「ZAMENHOFA EKZEMPLARO」 野村理兵衛著	1989年
★ 「エスペラント国探訪」 角谷英則著	1995年
★ 「Zamenhofaj Paroladoj」 CD全3巻 川西徹郎吹き込み	2001年
★ 「Gon-vulpo, kaj aliaj rakontoj」 新美南吉著、筒井和幸訳 (第91回日本エスペラント大会犬山の記念出版)	2004年
☆ 「エスペラントでうたう日本の歌」 小西 岳・山田義編 BELTONO 発行	2005年
★ 「センター通信」	1974年5月の第1号から2014年2月の272号に至る

3月16日 NEC 40周年記念パーティーのために鈴木善彦作成

## 犬山の城下町で開かれた

## 今年の東海大会は犬山エスペラント会が主催

# La 63a Esperanto-Kongreso de Tokaj

時：5月18日（日）10時より

所：城前通り式番屋2号館（犬山市）

参加者：37名

内容

**開会宣言**および JEI からの祝辞代読 長谷川勉氏（rondo SONKISOJ）

**楽器演奏** 三味線 馬淵勲氏  
東北の民謡他

**講演** 「日本の祭り」 石田芳弘氏（前犬山市長）【写真】

要点 石田氏が市長に当選後、道路拡張を止めて城下町をそのまま残すようにした。日本の宗教は多神教であり、神道と仏教が共存しているところに特徴がある。神社を中心とした祭りは豊作を願う人々の心を集約したものであり、地域コミュニティ活性化の一つの拠りどころとなっている。



**講演** Esperanto-hajko ktp 米川五郎氏 愛知教育大学名誉教授【写真】

要点 1950年に日本エスペラント学会に入会。

俳句の一例 山田天風氏作（愛知県出身）

Mi sola drinkas  
Ĉe l' avenu' ... Pariza  
suno nun sinkas

俳句は三行の挨拶であり、三行の会話である。エスペラント俳句の書籍として、宮本正男氏や広高正昭氏の著書を紹介。米川氏本人の俳句として、次の句を紹介。

violonĉelo  
sur dorso de knabino  
flugas hirundo



**昼食休憩** ワンデイシェフの店（チャンテイ）のランチを皆で食べる。



**講演** 「エスペラントと他言語」 小川博仁氏 (犬山市在住) 日本エスペラント協会会員 日本言語学会会員 日本歴史言語学会会員

要点 主にヨーロッパ系の言語の歴史的推移を示したのち、エスペラントがそのうちのどれに近いかを述べた。エスペラントがその語源を最も多く取り入れているのはラテン語であり、つぎに多いのがゲルマン語であり、またスラブ語も少しだがとりいれている。単語例として、*fingro*, *osto*, *havi* 等が何語系かを解説した。

**報告** 「スイス旅行」 黒柳吉隆氏 (Toyota Esp-Societo)

要旨 アイスランドのUKに参加した後、以前黒柳家にホームステイしたことがあるスイスのミレイユさんをたよりに、2週間にわたりスイスを旅行した。その内容を映像とともに紹介した。アルプスの氷河特急(実は鈍行)に乗ったり、山の麓をワンデリングしたり、天気にも恵まれ楽しい旅行ができた。各駅では常に三か国語(独、仏、英)による案内があること、スイスは26州でなりたっており、州の独立性が強いことなどが印象にのこった。

**朗読劇** Koro de Kristalo (水晶の心) Ĉambro Ĉarma

要旨 絵スライドと効果音を背景にした数名による朗読劇で、ベトナムの民話。

若者の吹く笛の音に魅せられたお姫様と若者の恋物語であり、身分の違いから、叶わぬ恋だが、死んだ若者が水晶になり、お姫様の宝物となる。

#### 回顧 永瀬義勝氏

エスペラントをはじめて既に50年、今年古希になった。100年前に来日したエロシェンコや昨年100年祭のあった新美南吉についての本などを紹介した。

#### 紹介 「クイズ 犬山城」西尾晴孝氏〔Rondo-Inuyama〕

国宝4城（姫路、松本、彦根、犬山）のなかで最も古くて、城下町が残っている犬山の紹介をクイズ形式で9問出し、正解者に記念品を渡した。

全員 **Minuta paroleto** で自己紹介と近況報告をした。

次回 東海大会の次年度開催地はNEC委員で検討することとした。

街並 閉会後城下町を散策、保存中の山車（やま）やカラクリ展示館、町家（磯部邸）の奥深い内部、城下町のミニチュア模型などを見学。

夕食 **Bankedo** は犬山ユースホテルにて25名が参加した。

懇談 **Babilado** には22名が参加した。

最初に齋木昌代氏が一寸変わった景品探しゲームを行った。話題提供として西尾氏が STAP細胞の先をゆく！？「千島学説」を紹介。赤血球が全ての細胞に可逆的に分化する（千島氏は岐阜県出身、故人）。

映像 黒柳氏が講演の続きで、スイスの美しい風景を沢山提供された。

#### 翌日

山歩き隊（8名）と明治村見学隊（5名）に分かれて、それぞれに堪能。山歩きは標高290メートルの大平山を2時間ほどで西尾氏が案内した。また明治村は午後4時ころまで後藤好美氏が案内した。どうもお疲れ様でした。

（文責 西尾晴孝）



## 12 tagoj en Koreio ... miaj spertoj

De la 18a ĝis la 29a de aprilo 2014 mi restis en Koreio. Estis la unua eksterlanda vojaĝo, kiun mi entreprenis sen akompano de miaj samlandanoj. Pasigi tiom da tagoj sen japana lingvo ŝajnis al mi iom tro aŭdace. Mi estis maltrankvila ankaŭ pro mia nesufiĉa lingvo-kapablo en Esperanto. Tamen metante mian fidon sur la varman helpemon de miaj koreaj geamikoj kaj ankaŭ pro mia arda motivo lerni ion novan en mia najbarlando mi decidis finfine la vojaĝon malfacilan sed nepre interesan. Do mi ekflugis unue al Seulo. La printempa vetero en Koreio estis tre agrabla, nek tro varma, nek tro malvarma. Vento blovetis milde kaj arboj estis freŝaj. Miaj koreaj amikoj preparis por mi jam antaŭe detalan itineron. Ĝi estis plenplena de jam starigitaj programoj.

———Pri la loĝejo———

Kelkaj esperantistoj afable invitis min gastigi ĉe ili. Tiu propono forte ĝojigis min kaj mi dankas ilin elkore pro ilia favoreco. Verdire mi estis



scivolema pri la ĉiutaga vivo de koreoj. Kaj efektive mi tranoktis en du privataj hejmoj; ĉe Brila kaj ĉe Anima. Aliajn amikajn invitojn mi ne povis sekvi, tre bedaŭrinde. Mia ĉefa loĝejo estis tamen ne en modernaj hoteloj, sed gastejoj de tradicia korea stilo, kie estis instalita “ondolo”, la ĉambrohejtilo, kiun mi sopiris sperti jam de longe. Mi pensas, ke ondolo senigas humidon kaj malvarmon de la homa korpo kaj tiamaniere tre bone efikas al la sano. Krome mi spertis tranokti en printempa kurso de Namkang Esperanto-lernejo en Chengdo.

La koreaj Esperanto-amikoj estis bone ligitaj inter si: la informoj pri mi estis akurate transdonataj pluen per saĝa telefonilo . Ili subtenis min mirinde sindone!

———Rilate al mia turismo———

Dank’ al geamikoj vere mi kontentiĝis. Ĉi-foje mi deziris ekskursi al Changdeok-gung 昌德宮, iama vilao en Seulo de la reĝoj de la dinastio Chosun kaj al la impona fortreso Suwon-hwaseong 水源華城 situanta iom sude de Seulo. Ambaŭ unikaj konstruaĵoj estas jam registritaj de UNESKO kiel Mondaj kulturheredaĵoj. Kaj plie mi vizitis tombejojn de la Reĝo I San kaj lia patro, kiuj troviĝis proksime de la fortreso. Ĉirkaŭ la tombejoj multaj civitanoj amuziĝis aŭ kuŝis sur la vasta herbotapiŝo. Ankaŭ ni kuŝiĝis tie sur la kampo samkiel aliaj civitanoj. S-ino Anima ludis bele per okarino la melodion de la furora televida dramo “I San”. Sed strange. Iu gardisto alproksimiĝis al ni kaj avertis, ke ni tuj ĉesigu la muzikludon! Ni bedaŭris pro la interveno des pli, ĉar la ludata melodio sonis kortuŝe bele. Mi iris ankaŭ al aliaj vidindaj lokoj akompanate de junaj homoj. Ili traktis min tre ĝentile kaj alparolis min senĝene kiel se mi estus ilia samaĝulino. Tio tre plaĉis al mi.

———Dum tri tagoj en tri universitatoj———

Antaŭe mi ricevis invitojn de tri universitatoj por fari tie Esperanto-lectionojn; en Universitatoj Kyunghee en Seulo kaj Suwon kaj Universitato

Wonkwang en Iksan. En ĉiu universitato mi parolis pri la japana ceremonio kaj feliĉaj spertoj en te-ĉambro. Mia ĉefa tasko estis: paroligi studentojn kaj doni al ili motivon por Esperanto-lernado. La studentoj komencis lerni Esperanton nur antaŭ du monatoj. La lekciejo estis preskaŭ plena. Troviĝis tie ĉirkaŭ kvindek gestudentoj. Mi sentis, ke mi devas doni al ili bonan impreson pri Esperanto. En la komenco la atmosfero estis iom rigida pro la streĉo. Mi havis la impreson, ke inter la studentoj kaj mi staras ia speco muro. Unue mi klarigis la etimologian devenon de mia persona nomo kaj sekve prezentis mian karesnomon en Esperantujo. Por ili voki min per Esperanta nomo ŝajne estis interese. Ili tuj al kutimiĝis nomi min "Sunjo". Ĉiuj gestudentoj direktis demandojn al mi kaj mi respondis, foje ni interparolis reciproke.

Estis evidente efike alvoki mian nomon unue, por glate daŭrigi la konversacion kaj ekparolon. Ekzemple: Saluton, kara Sunjo! (tiu alvoko proksimigis la distancon.) Kiel vi impresiĝis pri Urbo Seulo? ktp. Diversaj demandoj estis ĵetitaj, kaj mi respondis kun plezuro. Iom post iom la atmosfero fariĝis amika. Kaj fine la ĉambron regis kumuna etoso. Mian prelegon ili aŭskultis serioze kaj scivoleme. Iliaj okuloj briletis. Laste mi preparis la ŝaŭmigitan verdan teon kun dolĉaĵo, aldonante klarigon pri la trinkmaniero.

Kiam ĉio finiĝis la studentoj donis al mi grandan aplaŭdon. Por la ceremonio S-roj Ŝlosilo kaj Suno bonvolis interpreti en la korea lingvo.

———Kun SEK anoj———

Kompreneble mi ĉeestis en la kursoj de SEK (Seula Esperanto-kulturcentro), en kiuj ni havis lecionon, paroladon, tagmanĝon. En la lasta tago ni havis ĝisrevidan vespermanĝon kun kursanoj en la restoracio de GOSIRE. Unu el la partoprenantoj de la baza kurso regalis nin per bongustaj kuirajoj kaj alkoholo. Manĝante, parolante kaj ridetante ni ĝuis nian samideanecon. Kiam finiĝis la vespermanĝo, mi tute neatendite estis petita akcepti intervjuon kun ĵurnalisto de ĉiutaga gazeto NewDaily. Kompreneble mi ne forgesis mencii Esperanton!

——Alia nekredeblajo——

Okazis alia eĉ pli grandioza evento al mi. Ĝi efektiviĝis tute ekster mia atendo. Poste evidentiĝis, ke fakte estis s-ino Lee Seon-jong, pastrino de Ŭonbulismo, kiu preparis kaj aranĝis ĉion. Ŝi estras la Ŭonbulisman kulturenan domon 恩德文化院, kiu estas malfermita al publiko.

Nome, la 21an de aprilo en speciala ĉambro de tiu ĉi kulturdomo elstaraj altranguloj de la korea socio ĉeestis la te-ceremonion, kiun mi prezidis. Inter la gastoj estis eksa ambasadoro, parlamentano, ĉefdirektoro de Virina Paca Diplomatio, universitata profesoro k.t.p. por nomi nur kelkajn. Mia prezentado daŭris unu kaj duonan horon. Post salutovortoj mi parolis pri la partikularajn trajtojn de la japana te-ceremonio kaj pri la mirinda rolo de teo-kulturo, kiu kunligas amike la tri orientiajn landojn nome Ĉinion, Koreion kaj Japanion. La gastoj aŭskultis min silente, inkline. Post tio mi prezentis al ili la japanan-stilan te-ceremonion donante al ĉiu po unu taso da verda teo kun la vorto “feliĉon al vi”. Ili eltrinkis kaj gustumis la kukon, kiun mi kunportis el Japanio. Nun la Korea flanko reciprokis al mi la te-ceremonion laŭ la korea maniero. Ni trinkis la altvaloran teon kun speciala kuko. S-ino Lee estis treege kontenta je mia prezentado kaj emfazis la neceson de tia kunveno en estonteco. Dum la ceremonio tri fotoj prenis nian bildon. (Ankoraŭ mi havas diversajn interesajn spertojn, kiujn nun mi metis flanken, iam alfoje alparolos.) Tiel mi tre ĝoje kaj valore pasigis 12 tagojn sen iu ajn maltrankvilo, sed kun plena plezuro kaj neforgeseblaj memoroj. Pere de tiu ĉi veturo mi estas konvinkita, ke mi trovis mian irendan vojon de la vivo kaj mi forte esperas la plian proksimiĝon al la esperantistoj de mia najbara fratlando.

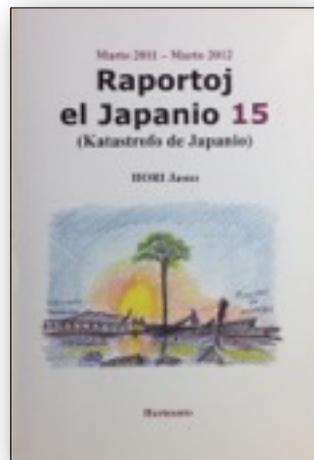
Koran dankon al miaj karaj gastigantoj Brila kaj Anima! Mi ŝuldas ankaŭ profundan dankemon al multaj aliaj geamikoj, kiuj realigis per siaj favoraj zorgoj la neforgeseblan vojaĝon plenan de samideana varmokoreco por mi. Koran dankon!

Sunjo.

## 読書会 第1回が…

堀泰雄さんのRaportoj el Japanio 15 の第1回目の読書会を、6月12日（木）午後4時から7時まで、名古屋エスペラントセンターで行いました。参加者は山田義、前田可一、伊藤俊彦の3名でした。

本書は、エスペラントによって、3.11以後の被災者の生活と思い、政府と東電に対する批判、著者自身の被災者支援の取組などを世界に発信する、比類のないドキュメントです。ただ、426ページに及ぶ大著であるため、全部をいちいち訳読することはせず、予め各自が自宅で読んでおき、当日は疑問点、問題点を論じあうというやり方で進めることとしました。疑問点とは、文法的なそれに限らず、語られている内容に関わるものも含まれます（ただ、前書きだけは、著者の執筆姿勢、さらにはエスペラントに対する取組姿勢が直截に表明されていることから、丁寧に読みました）。



本書は、2011年3月から2012年3月までのできごとを扱っていますが、読書会では、被災地の復興、大飯原発訴訟第一審判決、川内原発再稼働など、現在進行中の動きを踏まえながら、多岐にわたる議論がなされて、非常に有意義な会合となったと思います。

今回は7月24日（木）午後4時からセンターで行いますので、こぞってご参加ください。使用言語はとりあえず日本語です。センターに在庫がありませんので、JEL, KLEGあるいは堀さん本人から各自入手してください。なお、参加者は予め38～100ページを読んできていただくようにお願いします。また、第1回に出席されなかった方は、37ページまでの冒頭部分も読んでおいてください。（伊藤俊彦）

### 読書会に参加して、（山田からも何か書いたらと言われ、書いておく山田義）

伊藤さんから読書会をやろうと声をかけられた。むずかしい哲学用語や知らない歴史上の事件や人名地名に右往左往しながらエスペラントを読むのは大変だと心配していた。しかし、Raportoj el Japanio 15 を採り上げた。著者は知っている人、内容や記事はニュースで聞いたり読んだりしているものようだ。家では、以前から妻も楽しんで読んでいるシリーズ本だ。15巻は、地震と津波と原発事故をあの日から日を追って書いている。日本語でも馴染みのなかった原発用語も見事にエスペラントで書きあげ、世界に発信している本だ。話し合ったりしたことだが、勇気ある自家出版だ。

司会者はこの読書会のためにひと通りだけではなく、繰り返し読んであって、記事の内容などはウィキペディアなどでも確認をしてきている。だから、安心して質問できる。これからは読書全般について話題が広がっていくのかもしれない。読破力で競うのではなく、1冊の本をじっくり見ていくというやり方だ。読書家になったような気分になさせてくれる。だれでも参加しやすい勉強会になりそうだ。

出版されました！

## 『エスペラントは「私の大学」だ』

名古屋に住んでいた三ッ石清さんがせっせとあちこちのエスペラント会の機関紙に書いてあったものを集め編集した本が出来上がった。

出版は大阪のリバーロイ社。『エスペラントは「私の大学」だ』という本。「リバーロイ双書」として第9冊目だ。¥1,500。

編集は三ッ石清さんと深い交わりのあった豊橋の中山欽司さんだ。中山さんはこの本の編纂の動機について次のように語っている。

三ッ石さんは生前、ご自分の著作がないことを嘆いておられた。私の手元には、三ッ石さんからいただいたハガキや資料などはほとんど全部保管してある。2012年春からそれら資料の整理を始めた。掛川の石川一也氏、苫小牧の星田淳氏や、沼津の田中孝幸氏からも、JPEA機関誌等から資料も含めて提供していただいた。



おひとりで住んでいたせいも、おしゃべりが大好き、一人で次から次へと話しが止まらないので、ある時、これを指摘したところ、今から黙っておるから一人でしゃべれと言われたこともあった。またある時は、何が気に入らなかったのか突然、怒ってしまい、僕は帰る！、と言って去って行ったこともあった。いつも人一倍健康であることを誇りにしていた。しかし晩年は歩行困難となり車椅子の生活になり、食事をきちんと、バランスよく摂ることの大切さを教

訓とするように教えてくれている。

エスペラントに熱中、反動としてエスペラント界に絶望し、仲間に支えられて復活、ザメンホフ党员と称し、エスペラント普及の運動者であった。三ッ石さんを知らない世代の人にもこんな人がいたと知ってもらうために出版をしました。

リバーロイ社からの出版に先立ち、校正を山本修氏、製版を山田義氏が協力してくださり、この本が誕生しました。

——なお、ハガキや書簡もたくさん残っており、この本だけでは収録仕切れない量であるので、PDF画像を使ってCDでも出をするただいま編集中である。

編集委員から——新しく加わった前田可一です。

NEC40周年の集いに参加して、改めてセンターの運営を様々なかたちで支えてくださった多くの人々の多様な想いを感じました。一方で、センターの今後の展望については、次世代の担い手不足を解消する魔法の杖はない中で、どういったことづくりが可能なかといったことから考えていくしかあるまいと思います。

ことづくりということで、センター委員会の開催される日に「Konversacia Rondo」を、別の日に「Raportoj el Japanio 15」の読書会をいづれも毎月1回始めましたので参加希望の方はセンターのフェイスブックにアクセスし日時を確認のうえセンターまでお越しください。また、センター通信について、日頃感じているエスペラントやセンターについてのご意見、記事等をお寄せいただきたいと思います。

学生時代からエスペラント運動を開始し、就職後もセンター委員を永く務めていただいた伊藤真理子さんが長い難病生活を経て永眠されました。彼女は、エスペラントを、より多くの未来に継がり、より開かれた未来を形成する可能性の言語として選択したのだと思います。 合掌